

岩手県立水沢工業高等学校 部活動安全対策マニュアル(チェックリスト)

部活動の実施に当たっては、事故等を未然に防ぐために常に危機管理意識を高め、危険予測・安全確保に努めることが大切である。

1 安全管理体制の構築

チェック欄

(1) 学校の部活動に係る活動方針

「学校の部活動に係る活動方針」により、活動の方針並びに活動のきまりを確認する。

(2) 安全に関する知識・技能の習得

心肺蘇生やAED、エピペン等の救急対応や熱中症予防に係る校内研修を実施する。

(例) 遠征中に他校父母会の提供による汁物を食べアレルギー症状が現れた。

2 事故防止のための安全に配慮した適切な指導

(1) 生徒の健康状態の把握

不慮の事故を避けるため、生徒の健康状態を把握した上で、安全に配慮した適切な指導を行う。また、生徒の行動特性（注意力、把握力、認識力、運度能力等）や体質・既往症、常備薬・エピペン等の携帯についても把握する。

(2) 顧問不在時の対応

やむを得ず直接練習に立ち会えない場合には、他の顧問の教員と連携、協力し、あらかじめ顧問の教員と生徒との間で約束された安全面に十分に留意した内容や方法で活動する。

(3) 顧問不在時の練習内容の徹底

部顧問以外の教員が立ち会う場合や生徒が自主的に活動する場合は、危険性の低い内容とし、練習内容や練習方法を具体的に指示する。

(例) 野球部において守備練習は危険性のない活動と生徒が判断し実施した際、乱れた送球が目に入った。

3 各部における安全対策のポイント

(1) 陸上競技(投てき種目)

予想される危険

- ・他の種目と練習場を共用で使用することにより、投てき物が他の選手に衝突する危険性がある。
- ・後ろ向きの準備局面から投動作に入る場合、直前の前方確認を怠りやすい。
- ・回転系は前後左右360度に大きく失投する可能性があり危険である。
- ・網状の防護ネットには「たわみ」があり、投てき物が当たった場合に1～2mほど伸びるので、ネット間近にいることは危険がある。

事故防止対策

- ・他の部活動や種目等と時間帯や練習場を分けるなどの対策を講じる。
- ・サークル以外では試技をしない。

- ・投てき者は確実に周囲の安全を確認し、大声で「行きます」又は「投げます」と周知し、必ず自ら前方と周囲の者の反応を確認する。すべての安全が確認できた時に初めて投てき動作に入る。
- ・周囲の者は投てき物が落下するまで投てき物から目を離さない。

(2) 硬式野球

予想される危険

- ・バットスイング時に周りの他の選手にぶつかる危険がある。
- ・バッティング練習時、ピッチャーやボール拾いの選手に打球がぶつかる危険がある。
- ・バッティング練習時、ファウルゾーンで別の練習をしている選手に打球が当たる危険がある。
- ・ノック中のイレギュラーバウンドが当たる危険がある。
- ・落ちているボールを踏み、足を捻る危険がある。
- ・フライ捕球時、外野後方ネットやファウルゾーンのネットに激突する危険がある。
- ・守備時の野手と野手の交錯の危険がある。
- ・プレー中における死球などの不慮の怪我の危険がある。

事故防止対策

- ・バットを振る際の安全確認の徹底。
- ・ボール拾いの選手は必ずバッティング練習を注視させる。
- ・バッティングピッチャーは「行きます」と発声してから投球する。
- ・グラウンド整備を徹底し、イレギュラーバウンドを減らす。
- ・ボールや用具などがグラウンド上に落ちていないか、足下を確認する。
- ・選手同士の交錯やネット・フェンスへの衝突を避ける為、「危ない」の声を徹底する。
- ・事故や怪我が発生しやすいスポーツであることを踏まえ、指導者間で緊急対応の手順などを予め確認しておく。

(3) ソフトテニス

予想される危険

- ・給水不足による熱中症や脱水症状の危険がある。
- ・周囲の確認不足による生徒同士の接触等による負傷の危険がある。
- ・ストレッチやウォーミングアップ不足等による負傷の危険がある。

事故防止対策

- ・適度な水分補給の機会確保 ・危険なプレーを防止するための指導（コンタクトの仕方）。
- ・活動前の体調把握 ・十分な準備運動とストレッチ。
- ・指導者、生徒が応急手当手順や緊急時の対応を把握、確認。

(4) サッカー

予想される危険

- ・コンタクトプレーによる負傷、脳しんとう等
- ・給水不足による熱中症や脱水症状
- ・周囲の確認不足による生徒同士の接触やボールとの衝突
- ・ストレッチやウォーミングアップ不足等による負傷
- ・雷雨による落雷や負傷
- ・サッカーゴールの転倒による事故
- ・グラウンドの整備不良による負傷

事故防止対策

- ・危険なプレーを防止するための指導（コンタクトの仕方、ルールの確認）
- ・適度な水分補給の機会確保
- ・活動前の体調把握
- ・活動前の周囲の安全確認
- ・十分な準備運動とストレッチ
- ・天候の把握と適切な活動中止の判断
- ・サッカーゴールの固定と使用用具の管理
- ・グラウンドの整備、管理
- ・指導者の応急処置手順や緊急時の対応確認

（５）卓球

予測される危険

- ・卓球台収納作業中に下敷きになり、負傷する危険がある。
- ・ラリー中に体勢を崩し、転倒する（足首手首の捻挫）危険がある。
- ・部活動中の熱中症・脱水症状等の危険がある。
- ・不適切な準備運動や疲労蓄積による負傷の危険がある。

事故防止対策

- ・用具や競技環境の適切な管理・整備。
- ・十分な準備運動・ストレッチを行う。
- ・卓球台収納作業（その他階段の収納など危険な作業）は複数人で行う。
- ・エビデンスに基づいた熱中症対策。
- ・体調管理・けが・蓄積疲労への対処（給水・休息・通院）。
- ・生徒・保護者に部通信を配り、部活動運営について把握してもらう。
- ・指導者と生徒・部員同士の報告・連絡・相談を徹底する。

（６）バレーボール

予測される危険

- ・ボールコントロールによる手指、ジャンプや移動に伴う各関節・筋肉の負傷等
- ・選手同士の接触による転倒での負傷
- ・給水不足による熱中症や脱水症状
- ・周囲の確認不足による生徒同士の接触等による負傷
- ・ストレッチやウォーミングアップ不足等による負傷
- ・支柱の転倒やネットロープの破損による事故

事故防止対策

- ・危険なプレーを防止するための指導（ルール、戦術、ネット際動作の確認）
- ・適度な水分補給の機会確保
- ・活動前の体調把握
- ・活動前の周囲の安全確認
- ・十分な準備運動とストレッチ
- ・用具の整備と確認、管理
- ・指導者、生徒が応急手当手順や緊急時の対応を把握、確認

(7) バスケットボール

予想される危険

- ・コンタクトプレーによる負傷、脳しんとう等
- ・給水不足による熱中症や脱水症状
- ・周囲の確認不足による生徒同士の接触等による負傷
- ・ストレッチやウォーミングアップ不足等による負傷

事故防止対策

- ・危険なプレーを防止するための指導（コンタクトの仕方、ルールの確認）
- ・適度な水分補給の機会確保
- ・活動前の体調把握
- ・活動前の周囲の安全確認
- ・十分な準備運動とストレッチ
- ・指導者の応急処置手順や、指導者不在時の生徒への緊急時の対応確認の徹底

(8) 剣道

予想される危険

- ・道具の劣化による怪我
- ・竹刀での打突による怪我（難聴、外傷性耳小骨離断など）
- ・熱中症

事故防止対策

- ・活動前の道具点検や手入れを徹底する。（道場床の掃除や点検を含む）
- ・正しい着装にて行う。
- ・練習環境の確認を徹底する。（気温、湿度等）

(9) ハンドボール

予想される危険

- ・コンタクトプレーによる負傷、脳しんとう等の危険がある。
- ・選手交代時の選手交錯
- ・給水不足による熱中症や脱水症状の危険がある。
- ・周囲の確認不足による生徒同士の接触等による負傷の危険がある。
- ・ストレッチやウォーミングアップ不足等による負傷の危険がある。
- ・ハンドボールゴールの転倒による事故の危険がある。

事故防止対策

- ・危険なプレーを防止するための指導（コンタクトの仕方、ルール、戦術の確認）。
- ・適度な水分補給の機会確保。
- ・活動前の体調把握。
- ・活動前の周囲の安全確認。
- ・十分な準備運動とストレッチ。
- ・ハンドボールゴールの整備と使用用具の確認、管理。
- ・指導者、生徒が応急手当手順や緊急時の対応を把握、確認。

(10) ボクシング

予想される危険

- ・実戦練習による負傷、脳しんとう等
- ・給水不足による熱中症や脱水症状
- ・周囲の確認不足による生徒同士の接触等による負傷
- ・ストレッチやウォーミングアップ不足等による負傷

事故防止対策

- ・危険なプレーを防止するための指導（コンタクトの仕方、ルール、戦術の確認）
- ・鉄アレーを使用する場合は、人の後ろでは行わない。
- ・適度な水分補給の機会確保
- ・活動前の体調把握
- ・活動前の周囲の安全確認
- ・十分な準備運動とストレッチ
- ・指導者、生徒が応急手当手順や緊急時の対応を把握、確認

(11) 山岳

予想される危険

- ・熱中症、脱水、低体温症により行動不能に陥る危険性がある。
- ・難場での怪我、下山中の浮き石による転倒事故の危険性がある。
- ・荒天や雷に伴う天候の急変。
- ・野生動物（クマ、スズメバチ等）との遭遇。

事故防止対策

- ・登山前の装備点検で対策を講じる。特に、食料・飲み物・救急用具等、非常時のことを考慮し準備をする。
- ・難場や下山の際には手袋の装着を必須、また、必要に応じて長袖を着用する等、怪我防止に努める。
- ・事前に天候状況を確認し、登山の可否を判断する。現地において、多少なりとも雷の兆候を確認した場合は、直ちに登山を中止する。
- ・野生動物の出没状況を、事前の登山情報で確認し、登山の可否を判断する。合わせて、登山の際には、クマよけの鈴を身に付ける、又はラジオやスマートフォンによる音楽再生機能を利用し、人がいることを発信する。

(12) 柔道

予想される危険

- ・実戦練習による負傷（脱臼、骨折、脳しんとう等）
- ・給水不足による熱中症や脱水症状
- ・周囲の確認不足による生徒同士の接触等による負傷
- ・ストレッチやウォーミングアップ不足等による負傷

事故防止対策

- ・危険なプレーを防止するための指導と確認（投げ込み、乱取り、締め技）
- ・道場の喚起、扇風機の利用、適度な水分補給の機会確保
- ・活動前の体調把握
- ・活動前の周囲の安全確認
- ・十分な準備運動とストレッチ
- ・指導者、生徒が応急手当手順や緊急時の対応を把握、確認

- ・生徒の体力、知識、技能の把握

4 日常の活動に潜む危険性

(1) 活動の工夫、ルールの明確化

日常的にグラウンドや体育館等の活動場所を複数の部活動が共用して練習する場合、関係する部の間で禁止事項や活動の制限事項等について、事前に共通理解する。

(2) ヒヤリハット事例の情報共有

練習開始時には、禁止事項等について確認し、練習後には危険を感じたような出来事等(ヒヤリハット事例)について、報告し合い、次の練習に生かすとともに、他の部と情報共有をする。

(例) 陸上競技部の投擲エリアにボールを追ったサッカー部員に気付かず、砲丸投げの選手が投げた。

5 施設・設備・用具等の安全点検と安全指導

(1) 定期的な安全点検

毎月1回の安全点検で施設、設備の安全を確認する。

(2) 活動前の用具等の安全確認

運動部活動は、学校施設・設備・用具等を活用して行われるものであり、多くの部活動が共用するものであることから、活動に当たっては、顧問等と生徒が共に施設・設備の安全確認を行う。

(例) 体育館の照明にバレーボールが当たり破損した。後日、体育の授業時の振動で破片が落下した。

6 熱中症の予防と対策

(1) 暑さ指数(WBGT)に係る知識と活用

環境省「熱中症予防情報サイト」による活動地域における暑さ指数を把握し、指示事項に対応した活動計画や活動内容を徹底する。

(2) 応急処置に係る知識の共有

熱中症の予防に加え、応急処置の方法や、救急搬送や医療機関への申し継ぎに必要な事項について校内研修を実施し、生徒の生命と健康を最優先する体制を整える。

(例) 部室で休ませていた生徒に呼びかけた際の反応が弱々しかったが、反応があったため救急搬送をためらった。